JFL 及び EFL 教科書における文学テキストの比較研究

リッチングス・ヴィッキー・アン（神戸松蔭女子学院大学）

要旨

本研究は「日本語教育における教材としての文学に関する研究」の一環として取り組んだものであり、日本語教育における教材としての文学の位置付けを明らかにすることを目的としている。そこで本研究では、英語教科書における文学テキストの分析を行い、その結果をリッチングス(2015)で分析した日本語教科書における文学テキストの分析結果と比較し、日本語教育における教材としての文学の位置付けを考察する。比較研究を通して、英語教科書も日本語教科書も多様なジャンルとレベルの文学テキストを取り入れ、その割合に大きな差異がないことが判明した一方で、両者においては文学テキストを用いる目的が著しく異なっていることが明らかとなった。

キーワード

日本語教育、文学、教科書、教材分析、多読

1. はじめに

外国語学習の場合、学習した内容の文面上の意味が分かっても、文化的背景を理解しないまま実際の場面でコミュニケーションを試みると上手くいかないときが多々ある。そのような問題の解消法として、外国語教育では「レアリア」いわゆる生教材が注目され、学習言語の文化及び現実の社会を合わせて学習する目的で活用されている（国際交流基金, 2018）。日本語教育（以降 JFL）においても、様々な生教材、例えばチラシ、TV ガイド、新聞、雑誌などが教材として授業で使用され、文学も生教材の一つとして用いられている。一方、筆者は JFL における教材としての文学の位置付けを明らかにすることの一環として、これまで様々な調査を実施してきたが、欧米の外国語教育における文学教材の使用に関する先行研究（Hall, 2015）に比べると、JFL における文学教材の使用意義が見いだされていない現状は明白である（Richings, 2016; リッチングス, 2018）。そこで、行った調査の一つは教材分析である。具体的に、JFL 教科書における日本文学テキスト[1]の出現割合と扱われ方の傾向を調べた。そこから、JFL 教科書においては文学テキストの記載がないわけではないが、少量であることが明らかとなった（リッチングス, 2015）。当該調査では、JFL 教科書の分析を通して文学テキストの有無と記載目的及び形

[1] ここでいう「文学テキスト」とは、日本文学作品から抜粋した一部（excerpt）または全体（例えば詩など）を指す。また、本稿における EFL 教科書に関しては英文学作品を指す。

式は示せたものの、現状では文学テキストの使用傾向・活動傾向の把握のみにとどまっている。そのため、JFL における教材としての文学の位置付けをより深く検証することを課題とし、JFL だけでなく、英語教育（以降 EFL）において使用されている EFL 教科書を調べ、両者における文学テキストの出現割合と扱われ方の傾向を比較することが重要であると考える。

上述した課題を受け、本研究では、リッチングス(2015)で分析した日本文学テキストを用いた JFL 教科書と同基準に沿って英語学習を目的とした EFL 教科書の分析を行い、比較研究を実施した[2]。本稿では、分析方法を提示し、その上で両者の調査結果の比較を行い、教科書分析という観点から文学教材の JFL における位置付けを検証する。なお、本研究において述べる文学教材の意義とは、非文学テキストと比べた文学テキストの優越さ、または文学でなければならないという観点から認められるものではなく、他の生教材と同様、コミュニケーション能力だけでなく、文化的背景など様々なスキルを身につけるため役立つ教材の一つとして十分利用価値のある教材であるという立場から論を進めたい。

2. 分析方法

JFL 教科書の分析にあたり、『日本語教材リスト No.41』（日本語教材リスト編集委員会, 2017）を参考にした。一方、EFL 教科書における文学テキストの分析にあたっては、「英語教材リスト」に値するものが得られず、大手として知られている英語教材出版社６社、Cambridge University Press（以降 Cambridge）、Cengage Learning（以降 Cengage）、McGraw Hill Education（以降 MHE）、Macmillan Language House（以降 MLH）、Oxford University Press（以降 Oxford）、と Pearson Longman（以降 Pearson）の最新オンラインカタログ（Cambridge University Press, 2017; Cengage Learning, 2017; McGraw Hill Education, 2017; Macmillan Language House, 2017; Oxford University Press, 2017; Pearson Longman, 2017）を考察対象とした。その中から、JFL 教科書における文学テキストの分析と同じ手順で文学テキストを用いる EFL 教科書を検出し、出現割合と各テキストの記載目的及び形式を分析した。具体的に２側面から分析を行った。一つは、「教科書全体における文学テキストの位置付け」（以降、教科書の総合分析）、もう一つは、「文学テキストの学習活動」の分析である。前者の教科書全体の分析は分析の第一段階であり、文学テキストを含む教科書の総合的な考察を行うと同時に、文学テキストの位置付けを検証することを目的とする。教科書の総合分析においては、１）教科書の種類、２）教科書の学習目的、３）対象者、４）教科書のレベル、５）文学テキストの割合、６）文学テキストのジャンル、７）文学テキストの学習活動の有無

[2] 本研究は 2017 年度 JALT（全国語学教育学会）の助成を受けて、行われたものである。

の７点を分析項目とした[3]。続いて、後者の文学テキストに関連すると思われる学習活動の分析は分析の第二段階であり、第一段階分析で検出された文学テキストの学習活動、つまり文学テキストの練習問題自体を考察するための調査である。学習活動の分析に関しては、まず分析対象となる活動を形式別に分類し[4]、総合的にどの活動形式がどの程度用いられているのかを検証した。次に、検出された活動形式を学習目的別に分類し[5]、総合的にどの学習目的がどの程度想定されているのかを検証した。そして最後に、分析を通してあがった活動形式とその学習目的の特徴を検討するために、門田（2010）の学習目的のタイプ分類にならって、さらに学習活動のタイプ別分類[6]も行った。

このように、リッチングス(2015)で実施した JFL 教科書の分析と同じ手順で EFL 教科書の分析を開始し、まず上述した出版社６社の最新オンラインカタログに載っている教科書における文学テキストの記載有無を調べ、分析対象に値する教科書の抽出を行なった。その結果、オンラインカタログに記載されている 2073 冊のうち、合計 76 冊(3.7%)の教科書が文学テキストを記載していることがわかった。なお、ここでいう教科書の数値は JFL 教科書の分析と同様、カタログにおける学習者用教科書の範囲内の数のみを指し、ワークブック、辞書、教師用参考書等をカウント対象外としている。また、これらの数値に Graded Readers（多読教材）が含まれていない[7]。Graded Readers（以降 Readers）に関しては第５節で取り上げる。このように、合計 76 冊の EFL 教科書が文学テキストを記載していることがわかったが、本研究において、JFL 教科書の分析対象となった 21 冊[8]の数に合わせるようにし、英語教材の出版社６社からそれぞれ４冊[9]ずつ集め、合計 24 冊の EFL 教科書を分析することにした（Appendix 1）。次節では、両者の分析結果を提示し、比較考察を行う。

3. 比較調査の結果

---

[3] 教科書の総合分析は、JFL 教科書の分析と同様、吉岡（2008）を基に行なった。

[4] 活動形式の分類は門田（2001, 2010）、Alderson (2000)、Grabe (2009)の読解活動や読解評価の分類を基に行った。

[5] 活動形式の学習目的を分類するにあたり、門田（2010）が紹介する Nuttall(2005)の学習目的分類を参考にした。一方、活動形式と同様、学習目的の分析の段階で、Nuttall の学習目的の分類に当てはまらないものが検出され、追加項目を設定する必要があった。従って、検出された先行研究の分類に当てはまらない学習目的の性質を基に、独自の項目を設定した。

[6] ここでいうタイプ別分類とは、門田（2010）は Nuttall(2005)の発問の種類を２つに分けることができるとし、Nuttall の学習目的の分類をさらにタイプ別に分類し、学習目的のタイプ別を紹介している。その２つのタイプというのは、「A. 文字通りの意味を理解させる基本的な発問」と「B. 深い読みを促す発展的な発問」である。

[7] EFL 教科書の分析においては、Graded Readers は英語教材のカタログにおいて別枠として記載されているため、「教科書」としての分析から外した。本研究にあたっては、新たに Graded Readers を別枠として比較することにした（第５節を参照）。

[8] JFL 教科書の分析（リッチングス, 2015）では、「レベル別日本語多読ライブラリー」（多読教材）が分析対象に含まれ、合計 22 冊として記されている。

[9] ４冊の選定にあたり初級レベルから上級レベルまで異なるレベルのものを取り入れるようにした。

3.1 教科書全体の総合分析結果

JFL と EFL 教科書の第一分析段階である教科書の総合分析に関しては、２節で述べた７項目の比較考察を行なった。表１はそれぞれの項目の分析結果を示したものである。

表１　教科書の総合分析の比較結果

分析対象教科書数	JFL (21)		EFL (24)	
１）教科書の種類	総合学習 技能別 試験対策	8 8 5	総合学習 技能別	12 12
２）教科書の学習目的	総合的な運用力 総合的な読解力 日本語能力試験対策	8 8 5	総合的な運用力 総合的な読解力 総合的な読み書き能力 複数の目的（読解力・言語習得・読む楽しさなど） 総合的な読解力及び語彙力 総合的な聴解力 総合的な運用力及び自律的な発信力	11 4 4 2 1 1 1
３）対象者	学習者・一般		学習者・一般	
４）教科書のレベル	初級～上級		初中級～上級	
５）文学テキストの数	77		97	
６）文学のジャンル数	10		8	
７）学習活動がある文学テキスト数	18		24	

表１で示す教科書の種類は、概ね教科書の学習目的と類似し、４技能の育成を目的とした総合学習教材と特定の技能育成に特化した教材の２グループに分けることができる。JFL に関しては、試験対策を目的とした教材においても文学テキストが検出された。また、JFL 教科書の学習目的は「総合的な運用力」と「総合的な読解力」が拮抗しているのに対し、EFL 教科書の学習目的はさらに類別され、総合的な運用力や読解力の他に文学鑑賞の促進、読む楽しさ、総合的な聴解力、自律的な発信力などの育成が想定されていることがわかる。

対象者に関しては、両者は全体的に「学生、一般」を対象としている。次に、文学テキストが検出された教科書のレベルに関しては、JFL 教科書は「初級から上級」、EFL 教科書は「初中級から上級」という範囲になっている。その内訳は JFL 教科書の場合、21 冊のうち、中級レベルと中上級レベルが合わせて 13 冊（62%）、初級レベルが４冊（19%）、上級レベルが４冊（19%）の順である。一方 EFL 教科書の場合、24 冊のうち、中級レベルと中上級レベルが合わせて 11 冊（46%）、上級レベルが８冊（33%）、初中級レベルが５冊（21%）という結果となっているが、これはあくまでも分析対象となった６社の出版社

の中から均等にレベルを選定した結果であり、文学テキストを用いる EFL 教科書 76 冊の結果ではない。そこで、改めて EFL 教科書 76 冊の学習レベルを調べたところ、割合的に JFL 教科書の学習レベルと明らかな差異が認められなかった。

続いて、分析対象となった教科書において、どのくらいの数の文学テキストが記載されているのかを調べるために、各教科書の各課における文学テキストの数を見たところ、JFL 教科書は 77 点[10]、そして EFL 教科書は 97 点の文学テキストが検出された。両者において、実に様々なテキストが使われ、名作もあれば、それほど知られていない作品もある（Appendix 2[11]）。さらに、量的に多く用いられているテキストのほとんどが名作や古典として知られているものであることが指摘できる。一方、JFL 教科書の場合、同じ作品が何度か使用されているのに対し、EFL 教科書の場合、ほとんどの作品が１回しか登場しないながらも、同じ作家が繰り返し登場する。

文学ジャンルに関しては、JFL 教科書の方が多くのジャンルを提供している。JFL 教科書の場合、長編小説(18.2%)、ショートショート(16.9%)、短編小説(15.6%)、民話(14.3%)、物語(11.7%)、児童文学(7.8%)、俳句(6.5%)、和歌(5.2%)、詩(2.6%)、戯曲(1.2%)の順である。EFL 教科書の場合は、短編小説(33.0%)、長編小説(24.7%)、詩(17.5%)、児童文学(14.5%)、俳句(5.2%)、民話(3.1%)、伝記(1.0%)、伝説(1.0%)の順である。両者において長編小説と短編小説が上位３位に入るが、その順位と割合が異なる。短編小説に関して言えば、EFL 教科書においてはその割合が JFL 教科書の２倍である。そして長編小説は EFL 教科書では２位を占めるものの、JFL 教科書の数値を６%超えている。一方、ここで注目すべきは、JFL 教科書における「ショートショート」というジャンルの位置付けである。「ショートショート」は主に星新一が広めた形式で（佐藤知恵・村井源・徃住彰文, 2010)、短編小説より短い物語として知られ、日本文学においては「短編小説」と区別されている。「ショートショート」というジャンルは英語で *Short Short Story* または *Flash Fiction* (Galef, 2016)とされているが、本研究ではそれに値する英文学テキストが検出されなかった。「ショートショート」の数値は「短編小説」の数値をわずかに超えているが、両者を合わせても、EFL 教科書の「短編小説」の数値に及ばない。また、JFL 教科書における「物語」及び「和歌」の位置づけについては、この二つは日本伝統的な文学ジャンルとして知られ、英語において *Monogatari* と *Waka* として訳されているが、「ショートショート」と同様、本研究ではそれらに値する英文学テキストが検出されなかった。一方、ジャンル分析で最も目を引くのは、JFL 教科書における詩の割合の低さである。EFL 教科書に比べ、詩がほとんど取り上げられていないことがわかる。

最後に学習活動の有無を調べた。なお、ここでいう学習活動とは、教科書全体における

[10] ここでいう「点」は一つの作品（タイトル）を指しているため「点」として扱う。
[11] JFL と EFL の作品リストの一部であり、記載の多い順に列記したものである。

練習問題ではなく、当該文学テキストに関連あると思われる練習問題を指す。比較したところ、EFL 教科書は全冊において文学テキストを用いて行う学習活動を提示しているのに対して、JFL 教科書は 18 冊のみである。つまり、３冊は文学テキストを提示しているものの、あくまでも「読んでみましょう」という促しのみがあり、課題を伴わない。両者における学習活動は実に多様であり、様々な形式の練習問題が掲載されていることが明らかとなった。次節では、文学テキストを用いて行う学習活動の分類結果を示し、比較考察を行う。

3.2 文学テキストの学習活動の分析結果

3.2.1 活動形式について

続いて、分析方法で述べた手順を基に、第二分析段階である文学テキストの学習活動の分析を行い、文学テキストの練習問題の１）形式（表２）と、２）学習目的（表３）を分類し、その結果を比較した。本節では、まず学習活動の形式の分析結果について述べる。

EFL 教科書の場合、30 種類の活動形式が検出されたのに対し、JFL 教科書の場合は 23 種類である。両者において、様々な形式の練習問題が提示され、その量も様々である。表２が示すように、EFL 教科書の場合、「短答」（数語の短い文で答えさせる問題）、「ディスカッション」と「多肢選択」が最も多く使用されている形式である。JFL 教科書の場合、３番目に多く使用されている形式は「言語材料の導入」（新出語彙や漢字の提示）である。さらに見ていくと、EFL 教科書の「空所補充」、「読解ストラテジー」[12]、「聴解」などの割合が JFL 教科書のそれらの数値をはるかに超えていることと、EFL 教科書において割合が高い「文法」、「読解スピード」、「（絵）映像鑑賞」、また「スキミング」、「リ（ストーリー）テリング」、「会話練習」、「ロールプレイ」といった形式が JFL 教科書において検出されなかったことが指摘できる。さらに付け加えると、両者の冊数と文学テキストの数がさほど変わらないにもかかわらず、EFL 教科書の学習活動の合計数が JFL 教科書のほぼ倍あることも目立つ。

[12] 「言語材料の導入」と「読解ストラテジー」は２項目とも言葉の導入や情報提供であり、性質上練習問題ではないが、分析の段階で pre-reading 活動として出現している以上、本研究においては活動形式の一つとしてカウントした。

表２　学習活動の形式の比較結果

数	種類	JFL（数・%）		EFL（数・%）	
1	短答	269	47.3	280	30.6
2	多肢選択	97	17.0	59	6.4
3	言語材料の導入	77	13.5	57	6.2
4	ライティング	29	5.1	54	5.9
5	ディスカッション	19	3.3	129	14.1
6	考察	12	2.1	0	0.0
7	確認	10	1.8	11	1.2
8	空所補充	8	1.4	44	4.8
9	整序活動	5	0.9	22	2.4
10	情報転移	5	0.9	18	2.0
11	正誤問題	5	0.9	7	0.8
12	発表	5	0.9	3	0.3
13	書き換え	5	0.9	2	0.2
14	読解ストラテジー	4	0.7	39	4.3
15	マッチング	4	0.7	15	1.6
16	スキャニング	4	0.7	8	0.9
17	文章完成法	3	0.5	3	0.3
18	プロジェクット	2	0.4	4	0.4
19	間違え直し	2	0.4	1	0.1
20	聴解	1	0.2	44	4.8
21	グループ分け（マッピング）	1	0.2	17	1.9
22	朗読	1	0.2	5	0.5
23	比較	1	0.2	2	0.2
24	文法	0	0	45	4.9
25	読解スピード	0	0	17	1.9
26	（絵）映像鑑賞	0	0	14	1.5
27	リ（ストーリー）テリング	0	0	8	0.9
28	会話練習	0	0	3	0.3
29	スキミング	0	0	3	0.3
30	ロールプレイ	0	0	2	0.2
合計		569	100.0%	916	100.0%

3.2.2 学習目的について

次に、分析方法で述べた門田（2010）が紹介する Nuttall（2005）の学習目的分類を参考に、活動の学習目的の分類を行なった。分析の結果、JFL 教科書の場合 12 種類の学習目的を反映する項目が挙がったのに対し、EFL 教科書の場合は 14 種類である（表３）。JFL 教科書の場合、最も多く想定されている学習目的は「文字通りの理解」であり、その次は「語彙・語句の学習」と「再構築」（一文を超えたテキストの理解を促す発問）の順である。一方、EFL 教科書の上位を占めるのは「個人的反応」（テキスト内容を主観的に読み取らせる発問）、「語彙・語句の学習」、「再構築」の３項目であり、１位を占める「個人的反応」の数値が JFL 教科書の数値と大きく異なる。さらに、EFL 教科書の場合、上位の３項目の数値に並んで、「他技能への応用」（読む技能以外のスキルを向上させる発問）、「スキーマの活性化」、「読解理解の促進」、「文の主題」の割合も、JFL 教科書のそれらの数値を超えていることが目立つ。また、JFL 教科書において検出されなかった「クリティカル・シンキング」と「読書流暢性」という２種類の学習目的も比較的に高い数値である。以下は具体例を紹介する。

例えば、上級の教科書である Pathways Level 4 (Cengage)には、*The Martian Chronicles* という短編小説の文学テキストが記載されており、読む前(Preparing to read)と読んだ後(Understanding the reading)の活動が用意されている。読む前の活動は「語彙・語句の学習」(Building and using vocabulary) [13]、「推測」(Predicting)、「スキーマの活性化」(Brainstorming)などといった学習目的を有し、読んだ後の活動は「文字通りの理解」(Understanding main ideas) や「再構築」(Identifying meaning from context)のほかに、「クリティカル・シンキング」(Critical thinking) を学習目的としている。このように、客観的に物事を考える（批評的思考）ことに焦点を当てた学習活動が多く見られる。また、初中級レベルに当たる Longman Academic Reading Level 2 (Pearson)には、*I Ask My Mother to Sing* という詩が紹介されており、読む前(Warm-up)と読んだ後(Comprehension)の活動が用意されている。読む前の活動は「スキーマの活性化」(Warm-up questions)や「読解理解の促進」(Reading strategy)といった学習目的で掲載され、学習者の読解への抵抗をなくす目的で提示されていることがわかる。

学習目的の分類を総合的にまとめると、JFL 教科書の場合、上位の数項目に集中しているのに対し、EFL 教科書の場合、下位項目を除き、極端に高い数値があるわけでもなく、偏りが少ないことがわかる。一方、もっとも際立つのは JFL 教科書の１位を占める「文字通りの理解」の数値と EFL 教科書の数値の差である。EFL 教科書においては、「文字通りの理解」という学習目的は上位３位にも入っておらず、８位になっている。これは何を意味するのか、次節の活動形式と学習目的のタイプ別分析を踏まえて、考察のところ

[13] 日本語に対する英訳ではなく、当該教科書における英語の表題(heading)を指すため、教科書によって表現が異なる。以下同様。

で述べたい。

表３　活動の学習目的の比較結果

数	種類	JFL（数・%）		EFL（数・%）	
1	文字通りの理解	176	30.9	74	8.1
2	語彙・語句の学習	92	16.2	114	12.4
3	再構築	92	16.2	105	11.5
4	推測	69	12.1	97	10.6
5	個人的反応	38	6.7	122	13.3
6	他技能への応用	38	6.7	101	11.0
7	読解理解の促進	33	5.8	75	8.2
8	スキーマの活性化	17	3.0	84	9.2
9	文の主題	7	1.2	51	5.6
10	談話構成	3	0.5	2	0.2
11	自律性の促進	2	0.4	35	3.8
12	評価	2	0.4	9	1.0
13	クリティカル・シンキング	0	0	29	3.2
14	読書流暢性	0	0	18	2.0
合計		569	100.0%	916	100.0%

3.2.3 活動形式と目的のタイプ別について

３.１で述べたとおり、検出された学習目的はさらにタイプ別に分けることができる。文学テキストの活動形式と学習目的のあり方をさらに検討するにあたり、門田（2010）の学習目的のタイプ分類にならって、上述した学習目的のタイプ別分類を行った（註６を参照）。調べた結果、図１と２が示す３つのタイプが検出された。タイプ A の「文字通りの意味を理解させる基本的な発問」は、リーディング指導での基本的な問いであり、「読解において重要となる事実の把握や文内外での言語的な構造を把握し、文章に直接書かれた情報の意味を正確に理解させる目的がある」（門田 2010: 37）。一方、タイプ B の「深い読みを促す発展的な発問」とは、文章に書かれた情報を読み取らせた上で、主題に関して問いかける発展的な問いのことをいう。門田がいうには、「このタイプの発問は、一文を超えた談話レベルで文章のメッセージを読み取らせたり、筆者の意図や文章の主題を考えさせてテキストを客観的、或は主観的に読み取らせたりすることが目的である」（門田 2010: 37）。しかし、新たに設けた学習目的（註５を参照）を門田の分類に当てはめてみると、性質上当てはまらない項目が検出された。性質上当てはまらない項目はテキストか

ら学習できる、その他のスキルを反映させた活動であると判断し、新たに「タイプ C」を設けた。よって、本論において、タイプ C を「テキストから学習でき、その他のスキルの習得につながる発問」と定義する。

このように、上の学習目的のタイプ別分類に沿って、最後に文学テキストの学習形式と目的のあり方、つまりその関係を分析した（図１、２）。EFL 教科書の場合、タイプ A に属すると思われる学習目的の合計回数は 338（36.9%)、タイプ B は 308（33.6%)、そしてタイプ C は 207（29.5%)という結果となり、発問タイプ A が最も多く、タイプ C が最も少ない。そして、タイプ A とタイプ B との間にはそれほどの差がない。一方、JFL 教科書の場合、割合がタイプ A、タイプ C、タイプ B の順になっており、さらにタイプ A の数値がそれぞれタイプ B とタイプ C の数値の２倍を超えていることがわかる。これが意味するのは、JFL 教科書においては文字通りの意味を理解させる基本的な発問（タイプ A）が学習目的の半分以上を占めていることを示す。

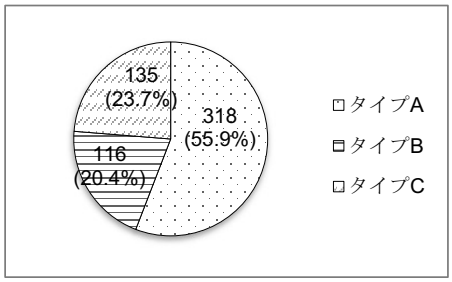

図１　JFL 教科書における学習目的のタイプ別

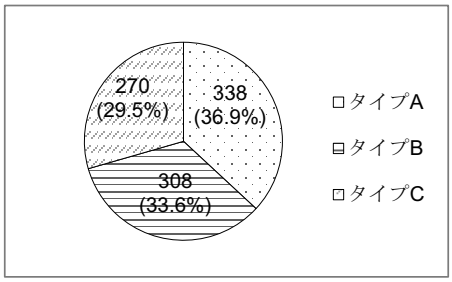

図２　EFL 教科書における学習目的のタイプ別

4. 考察

まず総合分析に関しては、文学テキストが総合的な運用能力や読解力の促進を目的とした JFL 及び EFL 教科書に使用されているといえる。それらの文学テキストの多くが JFL 教科書においては名作や古典として知られているものであるのに対し、EFL 教科書の場合は、それほど知られていない作品がたくさん使用されていることが見て取れる。次に、ジャンルに関しては、EFL 教科書においても、JFL 教科書においても、短編小説がその短さから、最も多く用いられているのではないかと考えられる。教育の観点からすると、一つのテキストを授業時間内で完結することができるメリットがある。また、多くの授業時間を要する長編小説が両者において断片的に使用されていることが意外な結果であるが、短編小説や長編小説の特徴を生かした学習というよりも、英語または日本語の難易度が選定の基準になるのではないかと推察される。長編小説が EFL と JFL 教科書の両方に多く用いられている背景には、学習レベル以外に、知名度であったり、語彙や文法のように断片的に扱いやすかったりするなどといった外面的な要因があると考えられる。

さらに、EFL 教科書に比べ、JFL 教科書においては詩がほとんど取り上げられていないことを受け、JFL 教育においては「俳句」「和歌」の位置付けの方が高い印象がある。このことから、JFL 教育においては詩が教材として軽視されているというより、同じ韻文にしても、より「日本的」である「俳句」や「和歌」が意図的に用いられている可能性がある。また、その低い割合の要因として指導の難しさが関係しているとも考えられる。一方、詩が教材として扱いにくいとはいえ、EFL 教科書においては詩が総合的な読解力のほか、総合的な運用力といった学習目的で用いられ、他のジャンルの数値に比べても高い使用率を示している。この点をさらに検証したところ、EFL 教科書においては詩の読解ストラテジーが詳細に記載されているのに対し、JFL 教科書においては「俳句」や「和歌」に関しても読解ストラテジーを紹介するような記載がないに等しい。さらにいうと、これは詩や俳句や和歌というジャンルに限らないことがわかった。EFL 教科書の場合、読解ストラテジーという形式が頻繁に用いられ、学習者の読解への抵抗を少なくし、且つ「読む」活動をより有効的なものにする目的で多く提示されていると推察できる。次に、教科書の学習レベルに関しては、両者において初級・中級・上級といったすべてのレベルの教科書に文学テキストが取り上げられている一方で、JFL 教科書は中級レベル向けの学習者に偏っているという傾向が見受けられる。この点を活動形式と学習目的のタイプ別という観点からさらに検証したところ、文学テキストはより高度な読解力や論理的解釈の育成ではなく、大意把握及び言語意識の育成が主な目的で活用されているのではないかと考えられる。

続いて学習活動の分析について述べる。両者の文学テキストの活動形式と学習目的を分析した結果、多くの活動形式が同じ学習目的を有することが明らかとなった。一方、EFL 教科書が最も多くの活動形式を提供し、最も多くの学習目的が想定されている。活動形式が「短答」に集中し、その次は「多肢選択」、「言語材料の導入」の形式が比較的に多く用いられている。これらの形式が文学テキストだけでなく、リーディング一般によく使用されている形式であることから、今回の分析をとおして挙がった活動形式の数値が文学テキストに依存しているとはいえないが、分析結果により、EFL 教科書も JFL 教科書も、当該学習活動にあたり、集中的にそれらの形式を取り入れているといえる。一方、JFL 教科書と違って、EFL 教科書が「多肢選択」、「言語材料の導入」という形式よりも、多くの「ディスカッション」形式を記載しており、学習者間のコミュニケーションの場を盛んに提供していることがわかる。さらに、EFL 教科書における「聴解」、「文法」、「(絵) 映像鑑賞」といった形式の数値の高さを受け、EFL 教育では JFL 教育と違って、文学テキストが様々な形と目的で学習者に提供され、様々な言語能力の育成を試みている現状が窺える。

最後に、発問タイプと学習目的の関係を総合的に考察した結果、文学テキストにおける学習活動に関しては、JFL 教科書においてはタイプ B の数値が最も低いことから、主に

テキスト内の意味を理解させたり、語彙及び表現力をつけたり、テキストから学習できるその他のスキルの習得を促す目的で練習問題が用いられていることがわかる。要するに、JFL 教科書においては、一文を超えた談話レベルの理解及び作者の意図や文章の主題について考えさせたりする活動が少ない上、学習者同士が文学テキストとその内容について意見を共有できる、または批判的に論じるといった活動がごく僅かである。例えば学習者にテキストの内容を個人的に評価するような発問や文の主題を問うような発問が限られている。それに対し、EFL 教科書における文学テキストは、単に語彙力や読解力の学習及び素朴な感想を問う目的で掲載されているのではなく、客観的・合理的に自分の意見と向き合い、それを発信するまたは学習者同士で語る目的で活用され、多面的な学習目的で用いられていると示唆される。

5. Readers について

分析を経て、EFL 教科書の場合、合計 76 冊の教科書が文学テキストを記載しており、全体の 3.7%であることがわかった。なお、２節で述べたように、教材の数値は JFL 教科書の分析と同様、オンラインカタログにおける学生用教科書の範囲内の数のみを指し、Readers が含まれていない。一方、Readers という教材は EFL 教育においても JFL 教育においても「読解教材」として位置付けられ、文学テキストを扱っている以上、触れずに論を進めることはできないと判断した。よって、本節では JFL 教育及び EFL 教育における Readers の位置付けを新たに分析し、割合と内容を検証した上でその結果を考察する。

まず EFL 教育について述べると、分析対象となった出版社６社の最新オンラインカタログにおける Readers を調べた結果、合計 2339 冊の Readers が出版されていることがわかった（表４）。もっとも多くの Readers を提供しているのは Cengage であるが、Cengage の Readers 1022 冊のうち、774 冊はノンフィクションであるのに対し、フィクションはたったの 248 冊である。Cengage Learning は National Geographic Learning とパートナーシップを組み、教材開発及び企画出版を行なっていることから、National Geographic の記事等を利用したリーダーズ・シリーズが多い現状である。また、Cambridge におけるフィクションの割合は５割を少し超える程度である。一方、その他の数値を見ると、MHE、MLH、Oxford、Pearson の４社におけるフィクションの割合が非常に高く、どちらも 80%を超えている。フィクションが中心的に取り上げられているといえる。総合的に見ると、2339 冊の Readers の 55.8%はフィクション、つまり文学テキストであることが明らかとなった。

続いて JFL 教育における Readers にあたる多読教材といえば、NPO 法人日本語多読研究会（2018）が 2006 年に開発した『レベル別日本語多読ライブラリー　にほんごよむよむ文庫』と大修館書店（2018）の『にほんご多読ブックス』がある。『レベル別日本語多

読ライブラリー』シリーズは入門から中級まで５レベルがあり、各レベルがさらに３つのボリュームに分かれている。『にほんご多読ブックス』シリーズは入門から中上級まで８ボリュームがあり、それらには４つから７つの話が収録されている。表５が示すように、JFL 教育もフィクションとノンフィクションの両ジャンルを提供している。また、EFL 教育と同様、フィクションの割合がノンフィクションの割合を上回るが、合計における数値の開きが EFL 教育よりも顕著である。一方、EFL 教育の数値からも明らかであるように、JFL 教育における Readers の種類と量が EFL 教育の約 20 分の 1 であり、極めて少ないことが指摘できる。EFL 教育では多読の実践が多く行われている一方で、JFL 教育では精読や速読が一般的であり、多読は数年前までそれほど取り入れられてこなかった（熊田・鈴木, 2015; 松井, 2014）ことが要因の一つとして考えられる。しかし、近年、EFL 教育における多読の研究及びその効果が広く報告されるようになったことをきっかけに、日本国内の多読への関心が高まり、日本語学習者向けの多読教材が続々と出版されるようになった。とはいえ、EFL 教育の約 20 分の 1 という現状や世界における日本語学習者の増加という点から考えても、果たして十分な量と内容であるかは疑問である。

表４　EFL 教育における Readers の分布

出版社	Readers	Fiction	Non-Fiction
Cambridge	216	120 (55.6%)	96 (44.4%)
Cengage	1022	248 (24.3%)	774 (75.7%)
MHE	128	118 (92.2%)	10 (7.8%)
MLH	210	192 (91.4%)	18 (8.6%)
Oxford	436[14]	364 (83.5%)	72 (16.5%)
Pearson	327	264 (80.7%)	63 (19.3%)
合計	2339	1306 (55.8%)	1033 (44.2%)

表５　JFL 教育における Readers の分布

出版社	Readers	Fiction	Non-Fiction
レベル別日本語多読ライブラリー	78	59 (75.6%)	19 (24.4%)
にほんご多読ブックス	45	31 (68.9%)	14 (31.1%)
合計	123	90 (73.2%)	33 (26.8%)

[14] この数値は Readers のみを示し、Oxford Reading Tree (ORT)というシリーズが含まれていない。ORT シリーズにおけるフィックションは合計 582 冊、ノンフィクションは合計 206 冊である。

6. おわりに

JFL と EFL 教科書の分析を総合的にまとめると、多岐にわたるジャンルとレベルの文学テキストが実際に JFL と EFL 教科書に取り入れられ、その割合に大きな差異がない。一方、EFL 教育の方が Readers という形で JFL 教育よりも多くの文学教材を提供しており、さらにそれらの Readers における文学テキストは様々なレベルの学習者の言語学習に役立つように工夫されている。続いて、JFL と EFL 教科書における文学テキストの学習目的の分析をまとめると、JFL 教育では、文学テキストが主にテキストの表面的な部分を理解させ、日本語の語彙や表現の学習を目的に提供されているようである。その一方で、批判的または分析的思考能力を促す発問、文の主題を読者として味わせたり、日本語の表現方法を学ばせたり、客観的にテキスト内容を読み取らせることがほとんど問われていない傾向にある。他方、EFL 教育では、文学テキストを用いて常に学習者間のコミュニケーションを促し、意見を自由に発信できる場を多く提供しているのに対し、JFL 教育においてはそのような工夫がほとんど見られない。

今回の比較研究を通して、EFL 教育における文学テキストは欠かせない学習リソースとして位置付けられているだけでなく、読解力に限らず、基本的運用力を含め幅広い言語能力の育成を図るという点において JFL 教育と大きく異なると結論付けることができる。EFL 教育に比べ、JFL 教育における文学教材や多読などに関する先行研究の乏しさが物語るように、この分野を掘り下げる研究の余地はまだ大いにあるではないだろうか。

最後に、本稿では文学テキストを対象に、JFL と EFL 教材における学習目的の違いを論じた。しかしこの違いが、文学テキストに限った議論といえるかどうかは明らかではない。今後は、文学以外のテキストも含め分析・比較し、文学テキストが外国語学習に果たしうる固有の意義について考察を進めたい。

参考文献

Alderson, J.C. (2000). *Assessing Reading*. Cambridge: Cambridge University Press.

Cambridge University Press (2017).
＜https://issuu.com/cambridgeupelt/docs/2017_japan_elt_ecatalogue?e=4254313/42119540＞
（2017 年 4 月 15 日）

Cengage Learning (2017).
＜
http://www.cengageasia.com/share/clacatalog/ELT/2017/JapanELT2017/catalog_JapanELT/index.html＞（2017 年 4 月 9 日）

Galef, D. (2016). *Brevity: A flash fiction handbook*. Columbia University Press.

Grabe, W. (2009). *Reading in a second language. Moving from Theory to Practice.* Cambridge: Cambridge University Press.

Hall, G. (2015). *Literature in language education*. 2nd ed. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

門田修平（2001)『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版

門田修平（2010)『英語リーディング指導ハンドブック』東京：大修館書店

国際交流基金（2018）＜https://www.jpf.go.jp/j/urawa/j_rsorcs/o_book01.html＞（2018 年 8 月 13 日）

熊田道子・鈴木美加（2015)「日本語教育における Extensive Reading (多読)の実践」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41, 229-243.

Macmillan Language House（2017). ＜http://download.mlh.co.jp/catalogue_2017.pdf＞（2017 年 4 月 23 日）

松井咲子（2014)「ドラマ的活動を取り入れた多読の実践報告―Reading Community の構築を目標として―」『ICU 日本語教育研究』 11, 21-27.

佐藤知恵・村井源・往住彰文（2010)「星新一ショートショート文学の物語パターン抽出」『情報知識学会誌』20(2), 123-128.

McGraw Hill Education (2017). ＜http://mheducation.co.jp＞（2017 年 4 月 2 日）

日本語教材リスト編集委員会（2017)『日本語教材リスト No.41』凡人社

NPO 法人日本語多読研究会（2018）＜http://www.ask-books.com/tadoku/jp/＞（2018 年 2 月 11 日）

Nuttall, C. (2005). *Teaching reading skills in a foreign language.* 3rd. ed. Oxford: Macmillan.

Oxford University Press（2017).＜https://www.oupjapan.co.jp/ja/catalogue/2017/index.shtml＞（2017 年 4 月 29 日）

Pearson Longman（2017). ＜http://dl.pearson.co.jp/PearsonCatalog2017web.compressed.pdf＞（2017 年 5 月 7 日）

大修館書店（2018）＜https://www.taishukan.co.jp/item/nihongo_tadoku/＞（2018 年 3 月 5 日）

リッチングス・ヴィッキー・アン（2015)「日本語教科書における文学的テキストの使用傾向―出現割合と扱われ方―」『LET 関西支部研究集録第 15 号』 pp. 121-135.

Richings, V. A. (2016)「研究対象としての文学教材―EFL と JFL における先行研究の考察」『言語コミュニケーション文化』13(1), 33-48.

リッチングス・ヴィッキー・アン（2018)「文学教材の意義をめぐる考察: 現代の日本語教育における教育観の観点から」『関西学院大学日本語教育センター紀要』7, 17-31.

吉岡英幸（2008)『徹底ガイド 日本語教材』凡人社

Appendix 1

日本語教科書	英語教科書
日本語中級 J 301 ―基礎から中級へ―（英語版）	American Think Level 3 (Cambridge)
日本語中級 J501 ―中級から上級へ― 改訂版（英語版）	English Unlimited Level C1 (Cambridge)
進学する人のための日本語中級	Discovering Fiction Level 1 (Cambridge)
J. Bridge for Beginners Vol.2	Viewpoint Level 2 (Cambridge)
日本語３ｒｄステップ	21st Century Reading Level 4 (Cengage)
中・上級日本語教科書日本への招待（第 2 版テキスト）	Impact Level 3 (Cengage)
上級日本語	Pathways Level 4 (Cengage)
英語圏版　マンガ『坊ちゃん』	World Link Level 2 (Cengage)
中級からの日本語　読解中心	Global Outlook Level 1 (MHE)
読解　現代文で読む古典と民話	Mosaic Level 2 (MHE)
日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本（中上級）	New World Level 5 (MHE)
中・上級者のための速読の日本語	Quest Level 3 (MHE)
どんどん読めるいろいろな話	Global Pre-intermediate (MLH)
みんなの日本語　初級 II　初級で読めるトピック２５	New American Inside Out Intermediate (MLH)
留学生のための現代日本語読解	Open Mind Level 3 (MLH)
上級学習者向け日本語教材　日本文化を読む	Skillful Reading and Writing Level 3 (MLH)
日本語パワーアップ総合問題集　レベル B	Cover to Cover Level 2 (Oxford)
短期マスター　日本語能力試験ドリル N2	English File Pre-intermediate (Oxford)
「日本語能力試験」対策　日本語総まとめ N1　読解	Lecture Ready Level 1 (Oxford)
「日本語能力試験」対策　日本語総まとめ N2　読解	Network Level 4 (Oxford)
「日本語能力試験」対策　日本語総まとめ N3　読解	Longman Academic Reading Level 2 (Pearson)
	Northstar Reading and Writing Level 4 (Pearson)
	Real Reading Level 2 (Pearson)
	Speak-out Upper-intermediate (Pearson)

Appendix 2

順	日本語作品 (JFL 教科書)	記載 回数	英語作品 (EFL 教科書)	記載 回数
1	俳句	5	Haiku	5
2	竹取物語	4	One Thousand Dollars	1
3	浦島太郎	3	Girl	1
4	注文の多い料理店	3	The Withered Arm	1
5	鼻	3	Tess of the D'Urbervilles	1
6	一休さん	3	The Adventures of Tom Sawyer	1
7	杜子春	2	The Californian's Tale	1
8	蜘蛛の糸	2	The Mask of the Red Death	1
9	むじな―怪談	2	The Tell-Tale Heart	1
10	窓際のトットちゃん	2	Journey to the Center of the Earth	1